



2007年

**SORA** 18号

晴夜 (18) | 3

柴田 佐知子

殺傷の闇に浮かべる桜かな

万緑の入口に立つ道祖神

大岩に滴りの筋曲りをり

川底を石も流れて青胡桃

水音の変はるあたりに蝮蛇草

蟻蠊の群れゐるのみが憎まるる

恋しくて見るどの窓も青葉の夜

老人に土の日向と梅筵

みな角が生えるぞ鶴の鳴く闇は

御開帳

秋 千 晴

開帳の釜も一年振りに出て  
村人の開帳の度結束す  
御開帳先祖たどれば遠縁に  
風車回りつつ色溶かしをり  
体中土をまぶして蚯蚓這ふ  
様々に曲がりくねりて白子干



マネキンの胸見えてゐる春の服

得意げにふらここ高くお兄ちゃん

鶯笛買うてすぐ吹く大宰府路

大鳥居いつぱい茅の輪の据ゑらるる

風薫る校舎にコーラス響きけり

秘仏見る空気重たし走り梅雨

そのひとつ帯にしてゐる菖蒲園

炎昼の猫背に傘の低くある

土用干しつけあるまま母の衣

擬  
視

あさなが捷

流し雛襟を正しく流れ去る

せつかちな父見失ふ苗木市

逢ふまでの楽しき時間あらせいとう

囀りや空にとび込み還らざる

観音の背筋正しき御開帳

御開帳観音の笑み疲れなし



片耳のちぎれて戻る恋の猫

馬鈴薯の花ゆるやかなる大地

何ごとか伝へて蟻のすれ違ふ

追ひ打ちをかけ迫り来る大花火

峰雲にしばらく乗りて観覧車

波穏やか丸められし地球の夏

一斉に舟虫岩へ吸はれたる

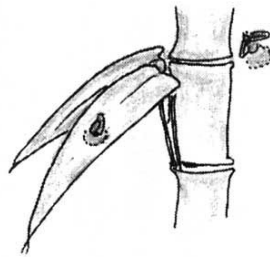
遠泳の手を振りてよりそれつきり

無防備な顔ひまはりに凝視さる

水中花

小林 朱 夏

母の日や櫛目の通る白き髪  
春風や芝生に憩ふ医学生  
水中花涙たまれば揺れにけり  
渾身の棒に打たるる大百足虫  
梅雨晴れ間寺男に蹴く寺の犬  
打水や終の一杓高々と





一打して案内待ちをり半夏生

回覧板滞る家杏子落つ

横道は一方通行金魚売り

荒行や鋼となりて滝を割る

毒のある言葉吸ひ込むダリアかな

夏の蝶羽で大きく息をせり

魚屋が持つていきなと海酸漿

先づ波のうねりを捉へ箱眼鏡

声先に入つて来たる帰省の子

遶山

苑 実 耶

よく笑ひよく走る子や入学す

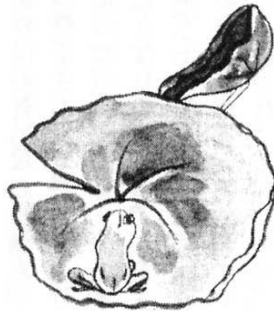
紗菜といふ菜の花の世に生れし子よ

生き雛壇上に座す誕生会

わらび狩顔をあぐれば連れはるか

聖五月父は生まれて死ににけり

街中の寺に真闇や梅雨最中



パン屑の動くを見れば蟻一匹

青嵐教会の塔天を刺す

仇討ちに藩の名残る花卯木

夏羽織薄紙当てし家紋かな

麦秋を高速道路二分せり

ミモザ咲く胡麻焼酎を山苞に

線香の匂ふ梶子行きすぎて

躑躅咲く大社に連山生まれり

一仏に真言ひとつ夏木立

さくら咲く

高倉恵美子

猪鍋や教師夫婦の子は猟師

病室に家族来たりてあたたかし

減塩食慣れぬままなり花大根

すみれ野にゆつくり沈む夕日かな

携帯電話持たぬ不安や春の雷

茄子トマト今年も無事に植ゑにけり



山笑ふやうやく通す針の糸

昭和にて数へる齡四月来る

さくら咲く子は定年となりけり

花の下夫を看取る話など

草餅や食細くなる同窓会

友逝けり煙となりて花の中

霾や足腰弱き友ばかり

葉桜や結婚報告メールにて

更衣着ることもなく捨てもせず